

特集「計算言語学」の編集にあたって

新田 義彦†

計算言語学 (Computational Linguistics) という分野名は、まだ馴染みが薄いと感じられる方が多いのかもしれない。この比較的若い研究分野はきわめて学際的で動的な性格を持っているため、確定的な定義を与えることがむずかしい。本特集では、「コミュニケーションの手段としての自然言語の持つさまざまな機能や性質を計算機科学の手法を利用して研究する分野」というようにゆるやかに定義したい。計算言語学と自然言語処理 (Natural Language Processing) との相違が気になる方もあろうかと思うが、後者は計算機上の応用システムを強く志向しているのに対して、前者は計算機科学的な立場から言語現象を解明することに重点を置いていると言えそうである。現象解明へのアプローチや現象解明の成果が、深くて新しい理論となったり、新しい可能性を秘めた応用システムとなったりすることは言うまでもない。このようにゆるやかな定義域を持つ結果、計算言語学が、計算機科学、数学、言語学、哲学、心理学、認知科学、ソフトウェア科学などと深い交流関係を保っているのは当然のことと言えよう。

本特集では、計算言語学の広大なテリトリを均一に網羅することは、はじめから意図していない。限られた紙数の中での総覧は、もちろんそれはそれで別の意義を持つものではあるけれども、退屈な術語や概念の羅列的説明に墮しやすいくことを考慮したためである。その代りに、計算言語学の研究や応用に直接的・間接的、意識的・無意識的に関わっておられる本学会誌読者の方々に、有意義なヒントやトリガを少しでも多く与えることを意図した。すなわち執筆者の方々に、ご自身の研究や見解を積極的に持ち出した、良い意味での個性の強い解説をお願いした。換言すれば、本特集は総覧というホワイト・ノイズの代りに、知的な刺激という鋭いスペクトルを提供することを狙っている。

とはいえ本特集の解説は、アドホックな偏りや真空地帯を持つものではない。計算言語学の要諦をバランスよく押えるよう企画したつもりである。すなわち、

本特集の12篇の解説は4部に大別できる。

第1部は、先行指標を与える歴史的な展望であり、

1. 計算言語学の歴史と展望

が対応している。

第2部は、理論的立場からの解説と問題提起であり、

2. 計算言語学の基礎領域——推論と発話の慣用性の問題を中心に——

3. 句構造文法

4. 計算言語学と論理学

5. 状況意味論の立場から

が対応している。

第3部は、技術や手法という立場からの分析的解説と問題提起であり、

6. 文脈処理技術

7. 自然言語理解における意味表現

8. 知識表現——論理的アプローチに焦点を当てて——

9. 文解析方式

が対応している。

第4部は、具体的な応用やインプリメントの立場からの解説と課題の提示であり、

10. 辞書構築における諸問題

11. ロジック・プログラミングと計算言語学

12. 日本語の構造とその解析

が対応している。

本特集の各解説では十分に触れられなかった事項については、冒頭の「計算言語学の歴史と展望」を手掛かりに、他の文献を読まれることをお勧めしたい。

本特集の各解説記事は、国内外で積極的な貢献をしつつある、我が国の計算言語学研究者の情熱と水準の高さを例示していると、密かに自負している。本特集が、情報処理学会の会員各位の日常業務に少しでも貢献できれば幸甚である。

末筆となったが、本企画に賛同され知的な示唆に富む解説をしてくださった、多忙な執筆者各位に深く感謝の意を表する。 (昭和61年7月29日)

† (株)日立製作所基礎研究所